

## 第 10 号(2009.04.05 配信)

年々、サクラの開花が早まっています。今年は暖冬だったか、3月に入って気温が高く、東京都心での開花はお彼岸最中の21日でした。ほんの十年ほど前まで「満開は4月」が常識だったように思います。ここ数年の早い開花は、やはり地球温暖化のセイかと考えさせられます。この分だと、いずれは、お彼岸の墓参とお花見が同じ時期に重なることになるのでしょうか。

今回は「サクラ特集」。酒宴の話ではなく、一人一人、それぞれのお花見の勧めです。

私は、昨年のお花見に、同道の5人とも初めて、飛鳥山に行ってみました。アスカヤマというと「奈良の近く？」などと、知らない方が少なくありません。唯一の都電・荒川線で行く江戸時代からの花見の名所です。徳川将軍家の菩提所・寛永寺がある上野で、花見どきに騒然と歌舞音曲や酒盛りで酔っ払いが繰り出されては大変に迷惑。幕府が長年抱えてきた課題に、八代将軍の吉宗が取り組んだ名所開発プロジェクトの代表格ですからハンパじゃありません。山というより広がりのある岡全体が一面のサクラです。好奇心をお持ちなら、山の上に並び立つ二つの博物館 - - 吉宗プロジェクトの解説や展示もある北区立飛鳥山博物館と、王子製紙の余韻ともいえる「紙の博物館」も目当てになります。

これは実は、一種の余談。結びに再見するでしょうから、前置きの一種というべきか。

さて本論、お花見の話。「長屋の花見」のムシロやゴザに替わり今はシートに、車座になって酒食やカラオケを楽しむのもよしとは思いますが、毎年、場所取り、ほろ酔い、ノド自慢だけで終わっては、年に一度の好機が、流れゆくままに過ぎてもったいない。まして読者の皆さんは、海外協力・生活の体験者、挑戦者ですから、サクラへの関心度や愛着がユニークであってフシギではありません。同じ体験者の私もこの際、花見観とでもいうか、観桜経験の一端を記してご参考に供します。

海外、特に南側の途上国に単身で住んでいると、日本との違いはよく分かっているけど、季節の移り変わりを感じにくいとか、日々の生活に潤いや情趣が少ないと思うものです。若い協力隊員ならば、しゃにむに前進！も結構ですが、時には故郷を懐かしみ、花鳥風月の端くれくらいは味わいたい気持ちがあって自然でしょう。途上国での生活が索莫と感じれば感じるほど、半年、一年後の健康管理旅行や一時帰国の機会には、精いっぱいフレッシュしようとするのも、また当然といえるでしょう。

海外赴任中に私が思い立ったのが、一時帰国の時期を選び、日本の自然を満喫する旅を計画することでした。日本の自然は、春と秋に美しさと特色があります。春といえばサクラの季節です。春先に「花見の旅」を考えました。都内や近郊は、いつでも行ける。この際、旅先は、自然の美しさや特色を感じる遠方がいい。普段なかなか行けない所に。

最初の目標は、それこそ奈良県の、ほぼ中央に位置しながら、やや奥まった感じの吉野山でした。昔からサクラの名所として知られ、自然に加えて歴史も文化も豊かといえそう。吉野には若い頃に仕事で行き、サクラの季節から外れていましたが、その折に宿や土地の人から聞いたサクラ模様がアタマの片隅に残っていたようです。

歌人の西行が詠んだ、数あるサクラの一首に「吉野山 去年のしをりの道かへて まだ見ぬかたの花を尋ねむ」(かなは原文のまま)が『新古今集』にあります。海外の任地で、中学生時代に学んだ西行のサクラを思い起こし、家内あての手紙でそんな経緯を記しながら、吉野山を歩こうと提案

し、二人旅のプランを頼みました。どんな山、どんな道だろう。想像し連想をしてみるのも楽しみの一つでした。

桜といえば今はソメイヨシノが主流ですが、西行の平安時代に遡るまでもなくかつてはヤマザクラが主力だったようです。吉野山の桜は、ずばりヤマザクラが主体でした。一面に咲き誇る華麗さはないが、山中に自然に群れを成し、前方や右に左に桜色の集合を眺めわたす。「こそ(去年)のしをり(山道などで木の枝を折っておく道しるべ)の道かへて」、まだ見ていない方の花を見に行こう。西行の思いが伝わってきそうな光景でした。質実、質朴な咲き様は、古武士の風格さえ感じさせます。そういえば、西行も、出家する前の若かりし時代は、北面の武士でした。

吉野山は「下、中、上、奥」に分かれ高度によって満開の時期が異なります。私たちは満開に近い「上の千本」に泊まり、咲き始めた「奥の千本」の手前まで登ってUターン。満開の「中の千本」を楽しみながら帰路につきました。

二度目の一時帰国も、京都に観桜の旅に出ました。単身赴任した旧友の、ぜひとの誘いに乗ったのです。京都には数回出向いていましたが、桜の季節は初回でした。当時評判だった平安神宮「枝垂桜コンサートの夕べ」、京都御所参観、修学院離宮参観と、手続きが面倒な予約を取り揃えてくれた彼の配慮には感激しましたが、桜と周辺的情景が見事で心に染みたのは、二人で散策した「哲学の道」でした。若王子神社と銀閣寺との間、約2キロの疎水べりの狭い散歩道です。西田幾多郎らが思索にふけりながら歩いたのが名付けのもとだそうで、それなりの雰囲気があります。

道端から頭上に高く伸びて咲く、疎水の向こう岸の庭先から突き出るような、多様な桜の咲きぶり枝ぶりを楽しみながら歩いては立ち止まり…。道沿いの家々のたたずまいもごく自然で、疎水をまたぐ木造の橋に立つと、京の都の春らしい風情を感じ…。これほどゆっくり桜行楽ができたのは初めてでした。満開なのに、混み合うでなし、歩く人が絶えるでもなし、東京ではとても味わい得ない、「持つべきは友」と再認識した旅でもありました。

日本人の、というよりも、東京周辺のお花見は、大勢の人出で何とも賑やかです。上野の山、隅田川公園、千鳥ガ淵から九段など、どこも体験済みですが、混むわ押されるわで歩くのがやっとのこと。自然に感動し、風情を味わい、桜の色合い、咲き方、美しさや清楚さえも感じ入るお花見がしたい、そう思うことはありませんか？

遠出をしなくても、ご近所の公園、学校、神社、史跡など、身近な桜に新発見があるかもしれません。独りでもカップルでも、家族連れで、仲間同士で、自然に親しみ、心に刻まれ、後々まで「良いお花見だった」といえる機会をつくってほしいとの思いを強くします。皆さんそれぞれのお花見の勧めです。

昨年が初めてだった飛鳥山の花見は、同道した仲間たちにも好評でした。しかし、去年は去年、今年はまだ違う方向に、別の桜を探して歩こう。その気心を西行に教わったように思います。「まだ見ぬ方の花」を訪ねる探求心を、いつも忘れずに。

(3月30日記。国際サブロー)